

# 見果てぬ夢

## —女高師から「言語文化」まで—

水谷 信子

### はじめに

今年の5月、東京都内のあるレストランで、東京女高師文科昭和21年入学生の同窓会が開かれた。東京女子高等師範は現在のお茶の水女子大学の前身である。集まった十数人が在学時代の思い出を語り、互いの健在を喜びあった。70年の年月を飛び越えて17歳の自分を目の前に見るような錯覚に襲われると同時に、卒業後の長い教師生活で得たと思っていたものが、実は当時の延長に過ぎなかったのではないのかと感じた。今回貴重な紙面をいただいて、その時の感動を思いおこしながら、現在までの日本語教育経験や考えているテーマのことなど書き記すことができることを感謝申し上げたい。

### 1. 女高師と言語文化

#### 1.1 国文学の魅力—東京女高師で学んだこと

終戦直後の混乱の中で送った当時の学生生活では、忘れたことも多いが、強烈に記憶に残っていることは、国文学の経験である。入学最初の授業の教室で、教壇の上にちょこんと立っているのが、受験勉強で読んだ文学史に名前の載っている尾上柴舟その人であるとわかった時、自分は大変な学校に入ることができた幸運な人間であると痛感した。「つけすてし野火の煙のあかあかと見えゆくころぞ山はかなしき」という有名な歌の作者がこの小柄な老人であった。その後、井本先生講義の与謝野蕪村の詩情、江湖山先生の国語学、曾根保先生の英語音声学などから断片的な知識を吸収した。修了後、東京大学の英文学科に進んで学んだものや米国ミシガン大学で著名な Fries 博士らに接して得たものよりも、女高師で得た国文学への親しみのほうが深く心に残ったのではないと思われる。雀百まで踊り忘れずの諺のように、若いときの印象は強烈で、戦後の混乱で実質3年弱しかいなかった東京女高師の記憶が細々としかし脈々と残ることに不思議な思いがする。

### 1.2 言語と文化

言語文化専攻という名称が議論された時、水谷が「言語文化」とは何であろうかと問いかけたのに対して、長友教授があつさり「そりゃ言語と文化でしょ」と言った。そうではない、言語と文化は「と」でつなぐものではない、言語に表れた文化だと水谷は言った。結論は出なかった。いま思うと言語に重点のある研究と文化に重点のある研究があるとも考えることもできる。長友説が正しいかもしれない。水谷は言語寄りには日英の対照研究から立場志向と事実志向<sup>1</sup>、文の直線的展開とジグザグ展開<sup>2</sup>などの問題を考察したが、言語が文化に密接に結び付いたと思われる問題としては、相槌の考察に多くの力を費やした<sup>3</sup>。今回はその相槌から「共話」「寄り添い」の問題をとりあげたい。いま女高師から言語文化への発展を考える時のテーマとしてふさわしいと思われるからである。

### 2. 相槌との出会い

#### 2.1 相槌と異文化衝撃

国際基督教大学で数年間、外国人に対する日本語の集中教育に従事したあと、米国の日本学専攻の大学院生の教育をする「日本研究センター」に移り20数年を過ごした。日本研究センターといっても名称は時に何回か変わり、現在は横浜市に移っているが、ここではそうした事実はさておいて、そこで接した米国の日本学専攻志望の青年たちから得たものの影響が大きかったことを述べたい。影響は主として日本人の言語習慣いわば言語文化に関するもので、その最大のものが相槌である。

英語話者が相槌を打たないことはまず衝撃であった。こちらが「きょうはお天気はいいけど風が強くて」というと日本人なら「エエ」と答える。そのあと「ちょっと空気が冷たいですがエエ」などと話が進むのであるが、英語話者の学生達「きょうはお天

気はいいけど風が強くて」といっても無言である。「ちょっと空気が冷たいですが」と続けてもシーン。さらに「ジョーさんお元気ですか」までこちらが言うと、始めて口を開いて「はい元気です、ありがとう」とにこにこしている。なれないうちは学生が黙っているのは怒っているのかと思ったりした。その後英語話者が相槌を一般に interruption と思っていることがわかった。ある中年の米国人の婦人が憤然として

Why do the Japanese keep interrupting me when I speak Japanese? Do they want me to stop talking because my Japanese is so poor?

と訴えたことがある。センターの学生たちは日本人の大学の先生や専門家に会って話を聞き、資料を得たり論文を書いたりすることになっているので、この話し方では相手の日本人が面食らってしまうのではないか、日本人の相手に嫌われたら仕事ができまい。これではいけないと思って、相槌を指導項目としてとりあげるようになった。

## 2.2 相槌の訓練

指導法として、日本人同士が相槌を打ちながら話す場面をテレビ番組の中から見せたり、実際に相槌を打つ教材を作って練習させたりした。水谷が相槌訓練係になって練習教材をつくった。当時のセンターは麴町にあったが、四ッ谷駅におりた友人に電話でセンターへの道を教えるという設定で会話文を作り、相槌を打つ箇所も斜線で指定して、2人で組んで練習することにした。一人が「駅の前に消防署があります」と言う。ここでもう一人が相槌を打つよう指定の斜線があるのだが、相槌の習慣のない学生は知らん顔をしている。ペアを組んだ学生が「ほら、ここで相槌」と注意しても気がつかないなどという場面もあった。個人差もあり練習してもなかなか自分で打つところまで行かない場合も多かったが、少なくとも日本人の相槌に理解をもつようにはなったと思われる。相槌を文化として扱うのではなく、語学教育の項目として扱った例である<sup>4</sup>。

## 2.3 相槌と連歌

センター在職中に国際交流基金の依頼で日本語について英語で講演をしたとき、講演を聞いたカナダの研究者から「相槌はたいへん興味深い。自分は日本の中世文学とくに連歌に関心をもっているが、連歌と相槌との関係はどうか」という質問を受けた。この問題提起についてまだ十分な答えを出せずにい

る。7月末の朝日新聞の夕刊に日・中・韓の詩人が共同して連詩を作ったという記事が載り、その中で詩人大岡信氏が連歌は座の文学であると言ったということが出ていた。連歌が座の文学すなわち共同作業による芸術活動であるとすれば、相槌は共同作業による言語活動であると言えると思う。この共同作業というのは日本言語文化の大きな特徴であろう。会話の中の文を話者が一人で完成するのではなく、二人であわせて作りあげることを自然とする考えは、日本に独自のものではなからうか。少なくとも特殊な文化であろう。オペラでも何人かの台詞が同時に音楽性をもって流れるが、それぞれの台詞は独立して、他と結び付くことはないという。日本語の中では共同作業による言語活動は少なくない。連歌だけでなく歌舞伎の割りぜりふなどもその一つであり、共感を表す終助詞「ね」の使用もそうである。こうした共存意識が文学史の中でどう表れているか、興味のあるところである。自分では力が及ばないが、だれか本格的に研究してくれる人が、とくに言語文化の卒業生から出てくれたらうれしいと思う。

## 2.4 国文学史への郷愁

本格的な連歌の研究はできなかったが、かつて女高師で親しんだ国文学への郷愁とでもいうべきものが常に胸の底にあった。女高師に留学していた韓国人学生から、記録は残っていないが、国文科の旅行で佐渡へ行った時、宿で学生たちが連歌をしたという話を聞いたことがある。米国人学生に相槌を教えながら、連歌、国文学、女高師という記憶はつながっていたのである。連歌の始まりといわれるものとして、やまとたけるのみことが

にいばり つくばをいでて 幾夜か寝つると  
問いかけたのをうけて火の番の男が

かがなべて 日には九夜 日には十日を  
と和したという話が伝わっているが、こうしたことから万葉集などへの思いを強めた時期もあった。

センターの学生は奨学金で学んでいるだけに優秀で、専攻の分野の限られた範囲では、日本語教育に従事する日本人教師よりも詳しい知識を日本について持っていた。時には日本人教師の教養を疑う者もいた。そうした学生たちに軽んじられぬために必死に日本史や国文学の復習をして、それでも薄氷を踏む思いで教室に臨むこともあった。学生から鋭い質問をうけてたじたとになりながらも切り抜けることを得たのは、女高師の記憶のお陰であった。ある時、

のちに東部の有名大学の教授になった女子学生から、芭蕉の句の「やがて死ぬけしきは見えず蟬の声」の「死ぬ」はなぜ「死ぬる」でないのかと質問されてぎくりとした。それも女高師時代の記憶に救われた。その後お茶の水女子大に戻り、のち明海大学に移るなどして日本語教育関係の仕事に忙殺されながら、国文学への郷愁はほそぼそと生き続けていたと今になって思う。

### 3. 「共話」から寄り添いへ

#### 3.1 「共話」

相槌を頻繁に打ち、また打たせながら話す日本語話者の心理面を考えると、それはひとりで独走しないで相手の出方に従うという、いわば共同意識にもとづいているのではないかと考え、その話し方を「共話」と名づけることを考えた。幸いに日本語教育に従事する人達の中に賛同してくれる人も現れ、研究発表などの中でこの造語を使ってくれる人も出て、ひそかに意を強うしている。この「共話」の考えをさらに進めたのが、補助動詞の使用の考察から発展した「寄り添い」の考えである。

#### 3.2 山に登ってきた

日本研究センターで開発された中級日本語の教材の中に「山と女性」という短いエッセイがある。これに基づいた会話文の冒頭に、

――こないだ白馬に登ってきたよ。

と友人に語りかける一節があった。とくに問題のある文ではないと思って次へ進もうとすると、一人の学生が「なぜ登ってきた」と「きた」がつくのですかと質問した。こないだのことであるから「けさ御飯を食べてきた」の「きた」とは違うはずであると言われて、はっとした。その時どう答えて切り抜けたか記憶にないが、この「きた」の用法について十分な説明のできなかつたことが長く悔いとなって残った。それから20年の後に補助動詞について考えを進めていた時に漸く解決に近いものにたどりついた。

補助動詞「いく」「くる」「みる」「おく」などについては日本語教育の場でもとりあげられ、とくに「寒くなっていく」「物価が高くなってきた」のような変化を示す用法はかなり早くから学生が学んでいる。しかし「こないだ山に登ってきた」のような用法はとりあげられることが少ない。現実の社会では

――先日、首相にお目にかかってまいりました。

――被害者のお宅を訪ねてお詫びしてきた。

というような用法が日常的に使われている。この「くる」は自己の経験を聞き手と分かち合おうとする姿勢を示している。そのことは、上記の例文から「くる」を抜いて「お目にかかりました」「お詫びしました」との違いを考えれば明白である。こうした「くる」の使用例は当然のことながら上級になった学習者の用例にも少ない。

「いく」についても、相手の今後の行動に寄り添う気持ちを表す用法があると思われる。

――せっかく来たんだから、お茶でも飲んでいきなさいよ。

――遠いところを来たんだから、二三日泊まっていきなさい。

のような例がそうである。この「いく」も「お茶でも飲みなさいよ」「二三日泊まりなさい」と比較してみれば、相違は明らかである。「いく」にはお茶を飲んだ相手や「二三日泊まった」あとの相手に対する話者の関心が感じられる。いわば相手に寄り添う態度であるということが出来る。「いく」についてこの用法の使用例は、学習者からこれまでに全く得ていない。

#### 3.3 補助動詞

補助動詞に対する関心を深めていたとき、2011年に中国の天津で開かれた日本語教育の世界大会で、研究発表をする機会があり、そのとき、補助動詞には立場志向性が強いことを述べたのであるが、聞きにきた参加者の中から、「お茶の水女子大で水谷の講義を聞いた」という人が名乗り出てくれた。実に25年ぶりの再会で、しかもこの山本裕子さんという人は、当時哲学科の学部生であったが日本語教育に興味を持ち、補助動詞の研究で学位をとり、今は大学で教えているという。その後彼女が、同じ発話でも補助動詞を使うか使わないかどちらを好むかについてアンケート調査を大学生らに行っているということを知った。アンケート調査では、たとえば会社員が上司に計画書を見せに行く時、「計画を立てたんですけど」というのと「計画を立ててみたんですけど」では、どちらに好感をもつかなどという調査などを行ったが、概して補助動詞を使うほうが好感をもたれるという結果を得たという。また「係の人に頼みましたから」というのと「係の人に頼んでおきましたから」というのではどちらが安心感をあ

たえるかという「おく」を使ったほうである、などという回答結果が出ているという話であった。こうした調査結果から、水谷は補助動詞のもつ相手への寄り添い意識を読み取ることができると考え、その後も山本さんと意見交換の機会を持っている。山本さんとの出会いにはまさに、お茶の水女子大の言語文化の縁が現在も脈々と続いていることを感じさせるものである。

### 3.4 寄り添いの意識

その後の補助動詞の考察から「いく、くる」だけでなく他の補助動詞の用法にも寄り添いの表現があることに思い至った。美容院などで聞く「シャンプーしていきます」の「いく」なども「シャンプーします」より丁寧に感じられるのは、相手に寄り添う気持ちが感じられるためであろう。また招待などを辞退するときの「今回は遠慮しておきます」の「おく」、「書いてみたのですが見ていただけますか」の「みる」など、実質的な動作を表すのではなく、相手への配慮を表すものと感じられる。パーティ場から先に帰る人に「あら、もう帰っちゃうの」という時の「しまう」にも、相手を喜ばせる配慮が見られるというのは山本さんの研究にもあった。こうした一連の情緒表現を「寄り添い」と総称したいと思っている。

補助動詞の中で授受動詞と言われるやりもらい表現にも、それが見られる。いわゆる利益授受の考えでは説明しにくい用法が存在する。たとえば道を教える時など、いつもではないが、人によって、

――まっすぐ行って次の角を右に曲がっていただくと、すぐ先に見えます。

のような言い方をすることがある。ホテルやガソリンスタンドの従業員などに多いが、この「右に曲がっていただくと」の「いただく」の用法は何であろう。道を教える人が、教えられて行く人が右にまがることから、どのような利益や恩恵を受けるのか。実質的な恩恵はない。これは、道に不案内な相手を「勝手に行け」と突き放すのではなく、寄り添って一緒にいくような温かい感情を示すと考えたい。一種の敬語と考えることもできよう。こうした「いただく」も「寄り添い」と考えられる。

補助動詞以外で「寄り添い」のもっとも端的な表れは相槌であろう。相手の語句の切れ目ごとに聞き手がことばをはさむのは、話者に対する「寄り添い」にほかならない。とすれば「共話」と「寄り添

い」との一貫性がここに見られる。文や語句の切れめにはさまれる終助詞「ね」もそうである。

## 4. 言語文化と女高師

### 4.1 日本語教育と日本語考察

日本語教育から日本語の性格に思いを致すという方向で、少しずつ考察を進めてきた結果、相槌の多用から共存志向に考えが及び、補助動詞の用法を考えていくうちに寄り添いという考えに到達した。こうした思考過程をたどったのは、長く英語話者に日本語を教えて、学習者のもつ違和感を切実にわがことのように感じたことが原因であろう。日本人はなぜ相槌をうるさいほど打つのか。富士山にのぼってきたの「きた」と「きた」を使うのはなぜか。日本研究センターの英語話者の学生達と日夜親しくつきあった20数年の経験が大きな原因の一つであろうと思う。優秀な学生達の孤独な競争意識から発する文化衝撃に対抗して日本語教師としてなんとか耐えきれたのは、女高師―お茶の水女子大―言語文化専攻の線に支えられた、日本語に対する愛着と自信ではなかったかと思われる。

### 4.2 国文科と言語文化

平成3年にお茶の水女子大に日本言語文化専攻が発足した時、多くの先生方に大きな力添えをいただいたことについては、『言語文化と日本語教育』第9号の中でも述べたが、改めてここでもう一度、感謝と感動を表したい。日本言語文化専攻の発足には、佐藤・大口両学部長のお骨折りをさることながら、長い歴史のある国文学科の一部を新専攻のために惜しげもなく割いてくださった国文学科の先生方には、お礼の申し上げようもない。当時の堤先生、浅井先生、犬養先生、三木先生、市古先生らの大らかなお心持ちには感謝と畏敬の念を禁じえない。いわば国文学科という整然と咲きそろった花園の一隅に、日本語教育という雑草が割りこむのを快く許してくださったのである。今はその雑草が成長して逞しい大輪の花を咲かせるようになった。国文学科も健在である。こうした発展の中で、東京女高師から今日まで生き抜いてきた自らの幸運を思い、感謝を新たにする思いである。と同時に、長年を費やして辿り着いた「共話・寄り添い」の論は、まだ緒についたばかりで、その完成を後進に託すことになってしまい、いわば「見果てぬ夢」を追う無力な結果になったことをお詫びしたい。

以上

注

1. 「話しことばの文法―英語との対照を中心に―」『日本語学』2008年4月臨時増刊号、明治書院、pp.16-22、「日英の談話の展開の分析―立場志向性を中心として―」明海大学大学院応用言語学研究科紀要『応用言語学研究』No.13、2011年3月、pp.105-17
2. 「談話の展開とあいづちを誘導する語句―「共話」の底にあるもの―」明海大学大学院応用言語学研究科紀要『応用言語学研究』No.10、2008年3月、pp.143-54
3. 『感じのよい英語 感じのよい日本語―日英比較コミュニケーションの文法』2015年3月、くろしお出版
4. 今年8月、長沼日本語学校での会合で、教室で相槌の指導を積極的に行っているという日本語学校の若い先生に会い、うれしく感じた。

みづたに のぶこ／お茶の水女子大学・明海大学 名誉教授